



# 筑紫女学園大学リポジット

The Role of a Private School in the Mii community of the Chikugo Area : Ryuen-juku from the Tokugawa Era to the Meiji Restoration

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 時里, 奉明, TOKISATO, Noriaki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1008">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1008</a>

# 幕末維新期における私塾と地域社会

## ―筑後国御井郡の柳園塾―

時里 奉明

### はじめに

本稿の目的は、幕末維新期に筑後国御井郡に存在した私塾柳園塾の実態を明らかにし、地域社会との関係を検討することにある。

一九三二年に刊行された『筑後名鑑（三井郡之巻）』は、「三井郡」の名士二五〇人を取り上げ、各人の履歴をたどりながら解説している。いくつかの市郡も『筑後名鑑』を刊行しているが、内容は歴史であったり、人名録であったり、編纂方針はさまざまであった。三井郡の場合、「顔写真付き」の人名録を編纂している。<sup>1</sup>

三井郡は一八九六年、御井郡・御原郡・山本郡の三郡が合併して成り立った。当時は福岡県のほぼ中央西寄りに位置していたが、一九二三年に郡制が廃止されたあと、三井郡から離脱する町村が相次ぎ、現在は太刀洗町のみになっている。

この『筑後名鑑（三井郡之巻）』は、一九二二年に編纂を開始してから刊行するまで約十年かかっており、相当難航したようである。そ

の編纂・発行人であった西村延次郎は、「発刊の辞」とともに、「井上昆江先生」という一文を載せている。冒頭の文章をあげておこう。

今回本稿を草するに当り老境にある大部分の方々とは同先生の塾にありて修学せられし事を知るに及び、茲に倉富一氏の過般筑後新聞紙上に発表せられたる同先生に関する精密なる調査になる一編を転載して先生の徳を回顧する事も又無意味にあらざるべし

井上昆江（一八二七―一八八）は、筑後国御井郡大城村（現久留米市北野町大城）で柳園塾という私塾を運営し、子弟を教育している。昆江が柳園塾を閉じたのはいつなのか、一八八五年と一八八八年の二説があるが、筆者は前者が有力であると考えている。<sup>2</sup>どちらにしても、柳園塾の閉塾から『筑後名鑑（三井郡之巻）』の刊行まで、半世紀近く経っているのがわかるだろう。

西村によると、三井郡の名士で老境の人たちの大半は、柳園塾出身者だという。そのなかには、表3にみられるように、衆議院議員をはじめ、県会議員、村会議員などの政治家、村長、学校長などの役人が

多数いるようである。若いころ柳園塾で学んだ人たちは、のちに郷土の指導者になったと言えるだろう。

私塾の研究は、咸宜園や松下村塾など、いくつかの有名塾を中心に積み上げられてきた。また私塾を開き、子弟を教育した学者や教育者について研究が進められてきた。<sup>3</sup>たとえば、咸宜園と廣瀬淡窓の研究は、数多くの業績を出し続けている。<sup>4</sup>その結果、咸宜園教育の内容、さらには塾生の生活が明らかになっており、時々直面した新たな問題に取り組み動態的な内実を理解することができる。これまで未解明であったためもあるが、咸宜園の完成された静態的なイメージは、大きく変わったと言えるだろう。現在も調査研究は進んでおり、その成果はいづれ咸宜園の全体像を描くことになるだろうと思われる。<sup>5</sup>

一方、今までそれほど知られていない地方の私塾、それに関する学者や教育者についての研究は必ずしも多くない。<sup>6</sup>また本稿で取り上げる柳園塾は、明治十年代の文部省の調査報告書である『日本教育史資料』に掲載されていない。<sup>7</sup>そもそも、寺子屋や私塾の全国的な普及・拡大は、もっぱら近世日本の教育水準の高さとして評価されてきた。しかし、そのあり方は地域差があることなどが指摘されながら、その実態の研究は進んではいない。<sup>8</sup>そのため、私塾はその地域にとってどのような存在であったのか、軽視されてきたように思われる。

以上をふまえて、本稿では次の諸点に注意しながら論述したい。柳園塾はどういう人たちをどのように育てたのだろうか。まず柳園塾の内容を簡潔に説明し、次に門人たちがどのような出自をもち、どのような履歴を経たのかを明らかにする。そのうえで、柳園塾は明治以降

の地域社会に何を遺したのかについて考察する。

## 第1章 井上知愚・昆江の略歴

柳園塾は御井郡大城村日比生の地で、井上知愚（一八〇六一—一八六〇）・昆江の父子二代にわたり運営された漢学塾であった。柳園塾は明治維新をはさんで、一八二七年から一八八五年まで約六〇年間続いた。<sup>9</sup>表1は井上父子の略歴を示している。この表にもとづきながら、二人の略歴を説明しておこう。<sup>10</sup>

### 第1節 井上知愚

知愚は一八〇六年、久留米藩士である井上要左衛門勝寛の次男として生まれた。知愚は号、通称は直次郎という。父の勝寛と同じく、小倉の渡辺有眼齋綱昌に新以心流居合剣術を学び、わずか七歳（以下、年齢は数え年）で免許を得ている。また柔術、槍術にも秀で、武道に長じていた。

一八二〇年七月、知愚は一五歳で咸宜園に入り、廣瀬淡窓に師事する。<sup>11</sup>知愚は帰郷と帰塾を繰り返しながらも、月旦評において順調に昇級を続けた。一八二三年十一月、知愚は淡窓の代理で日田代官所へ行っており、その後も代理でたびたび訪れている。このことから、淡窓が知愚を信頼していたことがわかる。その後も知愚は昇級を重ね、一九二五年五月塾長になった。<sup>13</sup>知愚が退塾して帰郷したのは、一八二六年が有力であろうと思われる。<sup>14</sup>

表1 井上知愚・昆江略年譜

西暦	年	月	日	事 項
1806	文化3			知愚、誕生
1812	文化9	8		父勝寛と同じく小倉の渡辺有眼斎綱昌に新以心流居合剣術を学び免許を得る、のちに印可皆伝
1820	文政3	7	2	知愚、咸宜園入塾
1823	文政6	11	1	知愚、淡窓の代理で代官所へ行く、その後たびたび使いをする
1825	文政8	5	10	知愚、塾長になる
1826	文政9			知愚、この年に帰郷か？
1827	文政10	春		知愚、開塾を淡窓に相談し許される、この年開塾か？
1827	文政10	10		昆江、誕生
1828	文政11	1		知愚、勝寛死去により浪人格を相続、月に数回藩士に居合術を指導
1843	天保14	9	5	昆江、咸宜園入塾
1846	弘化3	11	26	昆江、舎長になる
1847	弘化4	1	9	昆江、咸宜園を退塾して帰郷する、以後父の塾で働く
1847	弘化4	1	25	昆江、都講に追任される
1852	嘉永5	2	1	知愚、右筆格となり七人扶持を賜る、淡窓、祝詞を贈る
1860	安政7	閏3	1	知愚、死去（55）、昆江が塾を継ぐ
1869	明治2			昆江、藩命により戊辰戦争に従軍（戦争終結により引き返す）
1877	明治10	2		昆江、久留米師範学校教諭になる
1877	明治10			柳園塾は4年生の私立中学校「柳園学校」となる
1885	明治18	9	27	昆江、咸宜園の再興のため日田に移る、この時閉塾か？
1886	明治19	5	10	昆江、近々帰郷の予定
1888	明治21	8	16	昆江、死去（62）
1889	明治22	5		昆江の門人、墓碑を建てる
1925	大正14	10	26	昆江の門人、追悼会を善導寺恵照院で行う
1937	昭和12	6	5	『昆江井上先生』刊行
1937	昭和12	8	16	昆江の末娘宮原サメ、昆江の50年忌法要を行う

出典：『昆江井上先生』1937年、『増補淡窓全集』1971年、『久留米人物誌』1981年、倉富一「井上昆江（上）（下）」『筑後』1934年、「咸宜園門下生略伝（六）井上知愚・井上昆江」『咸宜園教育研究センター研究紀要』第8号、2019年、『廣瀬本家日記』（公益財団法人廣瀬資料館所蔵）、『北野町史誌』1991年、より作成。

一八二七年の春ごろ、知愚は故郷から淡窓を訪ねた。淡窓は後年、その時の事情を次のように回想している。

井上直次郎筑後ヨリ来訪ヒ、余ニ請ウテ言ヒケルハ、郷里ノ子弟、某ニ教ヲ受ケンコトヲ請フ者多シ。某不才浅学ヲ以テ辞ストイヘトモ、猶請ウテ止マス。父命シテ曰ハク、日田ニ行イテ先生ニ問ヒ、先生以テ可トセハ之ヲ始メ、不可トセハヤムヘシト。願ハクハ先生ノ一言ヲ以テ之ヲ決セント。余乃之ヲ許セリ。直次郎是ニ於テ塾ヲ開キ、四方ノ生徒ヲ誘引ス。ソノ後門客年ヲ追ウテ盛ニナリ、終ニ恒遠重富ノ二生ト、鼎足ノ勢ヲナセリ。<sup>15</sup>

知愚は郷里の人々から教えを乞われたため、淡窓の許しを得たうえで塾を開いたことがわかる。「柳園塾」の誕生である。また、その塾は恒遠醒窓の蔵春園（豊前国上毛郡）、重富繩山の嚶鳴館（筑後国竹野郡）と並んで盛んになったと記されている。蔵春園は咸宜園方式の教育方法を行い、門人は三〇〇〇人を数えたといわれている。<sup>17</sup> 嚶鳴館は、柳園塾と近い距離にあり、同じ久留米藩内の漢学塾であった。<sup>18</sup> 両塾ともに学んだ者も少なからずいる。<sup>19</sup> 淡窓の門人のなかで帰郷して塾を開いた者は何人もいるが、淡窓は知愚を二人と同様、優秀な塾主と評価していたのであろう。

知愚は開塾の翌年、父の死にともない久留米藩の浪人格を相続し、月に数回藩士に居合術を指導するようになった。一八五二年、知愚は長年の功績が認められ、右筆格となり七人扶持となる。この時、師の淡窓から祝詞をもらった。知愚は帰郷後も淡窓と会ったり、使いを送ったりしており、積極的に関係を続けていた。一八六〇年に死去、五十

五歳であった。

## 第2節 井上昆江

昆江は一八二七年、知愚の長男として生まれた。昆江は号、通称は栄である。おそらく、昆江の誕生と柳園塾の開塾は、同じ年であっただろう。一八四三年九月、昆江は一七歳で咸宜園に入っている。<sup>20</sup> 昆江は月旦評で着実に昇級を続けた。入塾して三年後の一八四六年十月、月旦評最上位の九級に昇級し、翌月「舎長」となっており、淡窓は塾内の最高職である「都講」に準じるとみなしている。<sup>21</sup> 他の塾生のなかでも、早い昇級であった。<sup>22</sup> 翌一八四七年一月、昆江は退塾して帰郷するが、その直後都講に追任されている。<sup>23</sup> 在塾者以外の者が都講に任命されるのは前例のないことであった。淡窓は昆江を高く評価していたのであろう。昆江もまた知愚と同様、帰郷したあとも淡窓と関係を続けていた。

帰郷した昆江は、知愚の塾を手伝うことになった。また知愚と同じく、居合などの武道に秀でていたという。知愚の死後は、昆江があとを継いだ。

明治以降の昆江は、どのような経歴を送ったのだろうか。昆江は戊辰戦争に久留米藩士として従軍し、東北地方で戦っている。一八七六年に久留米師範学校の教諭となり、翌一八七七年には柳園塾を「柳園学校」と改称して私立中学校へ転換している。昆江は学制に対応し、柳園塾の名称や形態を変えても存続を図ったのであろう。

ただし、それから八年ほどで、昆江は郷里を去り日田へ移ることに

なった。一八八五年九月、昆江は咸宜園再興のため、都講として迎えられたのである。<sup>24</sup>同年二月、廣瀬濠田が新しい塾主となり、咸宜園の再興を図った。濠田は淡窓の養子であった青邨の長男で、廣瀬林外が塾主だった時の咸宜園で学んでいる。<sup>25</sup>昆江は明治になっても、依然として漢学を中心に教えていたと考えられる。<sup>26</sup>咸宜園の門人のなかでも、漢学を担当するのにふさわしい人物だったであろう。こうした昆江の状況を考えると、「柳園学校」はこの時に閉じたのではないかと思われる。

ところが、咸宜園で教えたのは八ヶ月足らずであり、翌一八八六年には郷里の大城村に戻っている。帰郷の理由は、日田滞在中に病を患ったためとされている。<sup>27</sup>しかし、昆江の末娘にあたる宮原サメの言葉に、「翌年郷里に帰り、間もなく病魔に襲はれて大層衰弱致しました<sup>28</sup>」とあり、先述した通説と整合がつかない。しかし、サメはそれ以上のことを語ってはいない。昆江が病を患ったのは間違いないと思われるが、それはいつなのか明確になっていないので、帰郷の理由がよくわからないままである。そのことはともかく、昆江は二年後の一八八八年に死去した。六十二歳であった。

こうして見てみると、父子の共通点が多い。両者どちらも咸宜園で優秀な成績を修め、塾生の最高職（塾長、都講）まで登り詰めている。咸宜園で最高職につくことができた塾生はわずかであった。そのうえ、二人とも居合・剣術・柔術・槍術などの武道に通じていた。文武両道を極めた父子の資質が、柳園塾教育の基盤になっていたと思われる。

## 第2章 柳園塾の教育内容

現在柳園塾の教育内容が多少なりともわかるのは、昆江の塾長時代である。一九三七年、昆江没後五十年を迎え、末娘の宮原サメが門人の倉富一に依頼し、遺稿や資料を集め、一冊にまとめて刊行したのが『昆江井上先生』である。以下、この書籍にもとづいて説明したい。

### 第1節 柳園塾の生活

昆江の自宅は平屋で、講義室を設けると同時に、家族と暮らしていた。塾舎は自宅の隣にあり、瓦葺き二階建て一棟と北側の便所で、合わせて三〇坪であった。塾舎の一階の一部と二階が、塾生の自修室及び寝室になっていた。部屋に押入や棚などはなく、「寝具書籍箱其他の物品雑陳され、宛然古物商店式の奇観<sup>29</sup>」であったという。四方の壁に窓を開けているが、風雨を防ぐ時には戸板式の窓枠を卸していた。畳は塾生二人に対し一枚に限られており、あとは板間であった。灯火は葉鉄製のカンテラで、火屋の代わりに綿糸や紙の繕りをういたが、その光は仄暗く、臭気は鼻を衝いた。井戸は塾舎の南にあったが、やや泥混じりの水だった。塾生のなかには、設備が整っていないことに、不平を漏らすものもいたという。<sup>30</sup>

塾舎の仕事は、舎長以下の役員が分担して行っていた。炊事は昆江宅で行い、女中が塾舎の食堂に持ち込んでいた。飯は三食とも井一杯で、お代わりは有償であった。朝は汁一碗に野菜の漬物、昼は漬物のみ、夜は野菜の煮物が添えられていた。風呂は昆江の家族と共同で使



用していたようである。塾費は現在（一九三七年）の一ヶ月分で当時の半年分、あるいは一年分に相当したという。この記述は、具体的な金額を明記していないうえ、五〇年以上前のことを考慮する必要はあるが、柳園塾の塾費が格安だったのは間違いないであろう。なお、塾生の様子は次のようであった。

門生は概ね粗衣粗食を本分として、意気頗る旺盛、同情に富み、協力に富み、水魚の親、金蘭の交、詩吟朗朗、擊劍も励み、議論も努め、豪傑自ら許すの徒あり、時には当路の秕政談に慷慨悲憤するの輩もあり、要するに質実剛健の持主にして、今の文弱学生と比較すべきにあらず<sup>31</sup>

塾生は昆江の家族と共同生活を営み、衣食住は質素過ぎるほどであった。しかし、塾生は自由な風潮のなかで、お互いに協力しあいながら切磋琢磨していたようである。また武道に励んでいたのものがうことができる。

こうした塾を経営し、塾生を育てていた昆江とは、どのような人物だったのだろうか。ここで昆江の人となりをよく示している文章を紹介しておこう。

先生は鍛錬又鍛錬、筋骨逞しき偉丈夫、背長の割には面太く、頭は斬髪の常に長く、貫目充溢、一步忽かせにせざる底の堂々たる態度の所有者なりき。秋霜を以て自ら律し、春風を以て人に接し、威ありて猛からず、親むべくして褻るべからず。是故に人と争はず、而して人は常に先生に服したり。その家族に臨まる、や厳厲ならず、随つて叱咤の声の婢僕に至りしこと絶無なり。門人に

於けるも亦然り<sup>32</sup>

この記述によると、昆江は武道家としての風貌をもち、自分を厳しく律する一方、家族や召使いをはじめ、どんな人に対しても等しく寛容であり、師として尊敬される人柄だったと思われる。

## 第2節 柳園塾の教育

塾生の入門は、学制以前は初めから、学制以後は初等教育を終了してから許可した。入門者一人に古参の塾生一人をあて、素読という読方のみを行い、その進歩により聴講に参加させることにしている。

学問内容は朱子学が中心であり、講義は朱註によった。講義のテキストは、『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』の四書、『書経』、『易経』、そして『十八史略』、『春秋左氏伝』、『唐詩選』、『文章軌範』、『唐宋八家文』などであった。テキストは四書五経から歴史書、漢詩文に及んでいる。講義は自宅の一室である講堂で行った。午前は二つの講義で、最初の講義は全塾生、次の講義は上級生のみであった。午後も同様であったが、すべて質疑応答はなかった。

講義数回のあと、会読を行っている。会読は抽選で席次を決め、昆江の出席を求め、採点簿に記名した。上席から通読講義を行い、合格者には読方一点・講義二点の定点を与え、不合格者には欠点を付して次席に回した。そして、合格者が出るまで順番に席次を続けて、合格者が出るとそれまでの点数を合計した。そのため、合格者一回の得点は自分以外の点数を合わせて、数十点になることがあったという。

さらに上級生は任意の独見会があった。聴講以外の書籍を選択し、

最も難しい箇所を取り上げ、各自予習する。そして、本番では次席より上席に問い、もし上席者がその箇所を解釈することができなければ、順番に次席へと回っていく。昆江は火鉢を持ち出し、机によりて、喫煙しながら聞いた。上級生のなかで、文意の解釈が分かれたり、文章が難解だったりすると、甲論乙駁、口角泡を飛ばして激論になった。その時に昆江の判断を仰いだが、昆江は議論の優劣を判断して解決することを常としたという。

柳園塾において、明らかに咸宜園の教育方法を採用しているのは、漢詩文教育と月旦評である。その内実はともかく、形式的には咸宜園教育の主要な方法を踏襲しているといつてよい。

昆江は毎日午前九時ごろまでに、塾生が提出した漢詩文を添削している。詩は一日二首以下、文は一編に限った。昆江は甲乙丙の評価とともに批評文を記したが、相当出来の悪い詩や文に対しても、その程度に合わせて対応し、添削さえできないものに限り再考を命じた。ある門人は、その懇切さと努力は到底常人のできるものではないと評している。漢詩文ともに二十から三十になったら、推敲と称して各自集録して再提出させ、朱を用いて批評し、巻尾には賛辞をつけた。漢詩文を作ることは、情操を育み、豊かな人間性をつくる目的とともに、知識人必須の教養であり、コミュニケーションの手段であった。昆江は塾生たちを鍛えて、社会に有用な人間を育成することに精力を注いだのであろう。

月旦評は、咸宜園教育を代表する方法として有名である。柳園塾では別に試験はしないが、三、四ヵ月ごとに一回、塾生総掛かりで調査

し、成績表を各級別に作成して提出した。昆江はこれを検査して、進級すべきか否かを査定し、席次を変更して、月始めに一覧表を発表した。これを月旦評と称している。咸宜園の月旦評は、試験を実施したうえ、毎月行うのが恒例であった。<sup>33</sup>

このように、昆江は咸宜園の教育方法を取り入れているが、咸宜園方式のままではなく、塾生の人数や実態に応じて工夫をしているように思われる。<sup>34</sup>

### 第3章 門人たちの分析

#### 第1節 門人名簿の説明

先述した『昆江井上先生』の巻末に、三種類の門人名簿が掲載されており、合計二八五人の名前を数えることができる。<sup>35</sup> 最初の名簿は「柳園名簿」という名称で、「大正十四年の現存者にして謝恩祭当時の調査に係る」<sup>36</sup>とあり、八五人の名前と住所が記されている。一九二五年十月二十六日、昆江の門人たちは、久留米市の善導寺恵照院で追悼会（三十七回忌）を行った。この名簿は、その時の参列者であろうと思われる。

あとの二つは、「柳園名簿」に漏れた者たちを「現存者の記憶を辿りて録せしもの」であり、「或は居所を欠き名を逸し且多少の誤差あるやも計り難し」というものであった。<sup>37</sup> それらが「門人名簿補逸」の七五人と「門人名簿（追録）」の二二五人である。前者の住所は三井郡がほとんどであるが、後者の住所は国名のみ、郡市名のみ、町村名



のみと情報が限られており、空欄になっているものも多い。こうした事実から推察すると、「柳園名簿」のあと、本を編纂する一九三七年ごろ、柳園塾近くの門人たちを意識して一つの名簿とし、それ以外の門人たちの名簿をもう一つ作成したのであろう。

なお、柳園塾の入門簿は、存在したのか否かも含めて、確認できていない。そのため、誰がいつ入塾し、退塾したのかはわからない。つまり、門人名簿は柳園塾六〇年間のうちで在塾していた人々の記録という性格になる。また実際の門人をどの程度正確に書き留めているかも判然としない。後述する通り、知愚の塾長時代の門人が漏れているのがわかっている。門人名簿は、昆江の塾長時代が中心になっていると推察できる。

一方、三つの名簿に共通しているのは、名前と住所の二つの情報である。以上をふまえながら、名前と住所により柳園塾の門人を分析することにしたい。

## 第2節 門人の出身地

表2は住所を分析した一覧である。この住所を出身地とみなしておきたい。府県別によると、福岡県二〇六人（七二・三％）であり、次点は熊本県一九人（六・七％）である。そのほか、東京府や滋賀県など距離が離れた府県も確認することができるが、すべて一桁の人数であり、すべて合わせても一〇人台であった。

福岡県の旧国別では、筑後国一八二人（六三・九％）、筑前国二四一人（八・四％）になっている。柳園塾の存在する御井郡の東部は筑前

国に接しているが、同国出身の門人は一〇％にも達していない。また豊前国は福岡県の一部になっているが、同国出身者はいない。

筑後国（一〇〇％）のなかでは、三井郡一三二人（七二・五％）が最も多く、御井郡から独立した久留米市を合わせると一四一人（七七・五％）となり、次点の浮羽郡三三人（一八・一％）を引き離している。また三井郡（一〇〇％）の旧郡別では、御井郡九三人（六九・四％）、山本郡一九人（一三・八％）、御原郡一六人（一一・六％）になっている。

全門人数からみると、三井郡の割合は四九・五％と圧倒している。門人は全体のほぼ半数が三井郡出身であり、とくに御井郡に集中している。柳園塾の門人は近隣の人々が中心であった。

## 第3節 門人の出自と履歴

表3は、門人名簿のなかから三井郡出身者を対象に、『三井郡人名辞書』などを参照して、出自と履歴を記載したものである。三井郡一四一人（一〇〇％）のうち、出自や経歴がわかるのは四三人（三〇・五％）である。

まず、出自は庄屋などの村役人、地主、僧侶、神主、医者などが多い。次に、経歴をみると、衆議院議員、県会議員、郡会議員、村会議員などの政治家、村長、学校長などの役人や教育者、会社役員が目立っている。僧侶や医者も多い。以上の事実をふまえ、出自や履歴を総合すると、近世の指導層や知識層が、近代でもそのまま移行しているように思われる。

表2 門人出身地の分析（人、％）

府県別285人		旧国別285人					
福岡県	206 (72.3)	筑後	182 (63.9)	→ 郡市別（筑後182人）			
熊本県	19 (6.7)	筑前	24 (8.4)	三井郡	132 (72.5)	→ 旧郡別（三井郡141人）	
佐賀県	4 (1.4)	肥後	19 (6.7)	浮羽郡	33 (18.1)	御井郡	93 (66.0)
滋賀県	2 (0.7)	肥前	7 (2.5)	久留米市	9 (4.9)	山本郡	19 (13.5)
東京府	2 (0.7)	武蔵	3 (1.1)	八女郡	4 (2.2)	御原郡	16 (8.8)
長崎県	1 (0.4)	近江	2 (0.7)	三瀧郡	3 (1.6)	不明	11 (6.0)
大分県	1 (0.4)	讃岐	1 (0.4)	山門郡	1 (0.5)	計	141 (100.0)
広島県	1 (0.4)	不明	47 (16.5)	計	182 (100.0)		
香川県	1 (0.4)	計	285 (100.0)				
神奈川県	1 (0.4)						
不明	47 (16.5)						
計	285 (100.0)						

出典：『昆江井上先生』1937年をもとに作成。

注：三井郡は1896年、御井郡、山本郡、御原郡を合併して成立。旧郡別の御井郡93人は、久留米市9人を含む。久留米市域は、1889年に市制を施行するまで御井郡に属している。

さらに筆者は、咸宜園の系譜を明らかにするため、三井郡出身に限  
定せず、門人中に私塾を経営した者がいるかどうかを調べてみた。そ  
の結果が表4である。この七人は、淡窓の孫弟子と呼ぶことのできる  
人物になるだろう。

後藤顕蔵、吉富復軒は先述の門人名簿に名前がないが、二人とも知  
愚直接の門人であった。そうしたことを考慮すると、門人名簿は知愚  
の門人を少なからず漏らしている可能性がある。また浮羽郡出身が大  
半を占めているのが特徴であった。

履歴によると、知愚や昆江に師事しただけでなく、廣瀬淡窓をはじ  
め、重富繩山、倉富篤堂、米谷春里ら複数から学んでいる者もいる。  
重富、倉富、米谷は咸宜園の門人であり、いわば咸宜園グループから  
漢学を学び、地元で私塾を開いているといつてよい。さらに幕末維新  
期でもあり、政治性の強い人物がいるのがわかる。後藤顕蔵は国学も  
学び、明治の欧化主義の風潮に悲憤して身を投げたといわれている。<sup>39</sup>  
石橋六郎は大村益次郎の暗殺事件に関係ありとされた長州藩士の大柴  
源太郎を匿った理由で処罰されている。<sup>40</sup> どちらも反政府的な言動を示  
しているのは興味深い。

ここで代表的な門人を三人取り上げ、説明しておこう。佐々木正蔵  
は、御井郡光行村の佐藤家に生まれ、同郡上東鯉坂村の庄屋であった  
佐々木家の養子になっている。その後、佐々木は戸長、県会議員を経  
て衆議院議員になり、当選一〇回を数える大物政治家になった。とり  
わけ、若いころから筑後川の治水に奔走したことはよく知られてお  
り、後年「治水翁」と称されている。<sup>41</sup>

表3 柳園塾門人名簿（三井郡）

姓名	旧郡名	町村名	大字名	人名辞書	備考
清原峰鷲	御原郡	三国村	三沢	○	光明寺住職、本山布教使
久保山教語	御原郡	三国村	横隈	-	明願寺住職
轟久次郎	御井郡	弓削村	上弓削	-	
平野淳	御井郡	弓削村	石崎	-	
速水新	御井郡	弓削村	石崎	-	
上瀧順太郎	御原郡	大刀洗村	上高橋	-	
松隈常太郎	御井郡	大堰村	守部	○	大地主、大堰外二ヶ村水利組合員、名誉村長
松隈茂蔵	御井郡	大堰村	守部	-	
中村繁吉	御井郡	大堰村	友光	○	家系は庄屋、大堰村長
佐藤茂次郎	御井郡	大堰村	西原	○	大堰村収入役、名誉村長
小城左並	御井郡	大堰村	富多	○	父は藩士、富多小学校長
小城左司馬	御井郡	大堰村	富多	-	
河原抵助	御井郡	大堰村	守部	○	郡会議員
小笹真太郎	山本郡	善導寺村		-	
福山峰雲	山本郡	善導寺村	津遊	-	
棕林彦次郎	山本郡	善導寺村	飯田	-	
一富米太郎	山本郡	善導寺村	木塚	○	保長、村会議員
一富虎吉	山本郡	善導寺村	木塚	-	教員、戸長、学務委員
守本秀	御井郡	金島村	八重亀	-	
秋山清太	御井郡	金島村	八重亀	-	
甲斐田藤太	御井郡	金島村	八重亀	-	
道家正太郎	御井郡	金島村	八重亀	-	
細川清助	御井郡	金島村	八重亀	-	
堀田孝太郎	御井郡	大城村	稲数	-	
立花実依	御井郡	大城村	稲数	○	光福寺住職
光安平信	御井郡	大城村	赤司	-	
日比生彦次郎	御井郡	大城村	仁王丸	○	京都高等美術工芸学校卒、家業の機業を継ぐ
福田芳太郎	御井郡	大城村	塚島	○	名誉村長、村会議員、郡会議員、三井電気軌道株式会社監査役
平野俊太郎	御井郡	大城村	舟端	○	父は儒医、村医、校医、郡医師会長、伝染病院担当医
古賀憲彰	御井郡	大城村	日比生	-	
橋原成一	御井郡	北野町		-	
井上清次郎	御井郡	北野町		○	材木・肥料商、町会議員、三井電気軌道株式会社取締役
中野龍信	山本郡	大橋村	蜷川	-	
益永朋来	山本郡	大橋村	蜷川	○	酒造家、郡会議員、筑水銀行専務取締役
清松直衛	山本郡	大橋村	常持	-	
樋口陽太郎	御原郡	立石村		○	庄屋、村会議員、郡会議員
赤松スナヲ	御原郡	立石村	干潟	-	
徳安寛	御井郡	宮ノ陣村		-	医者
鶴川長次郎	御井郡	合川村		○	村会議員、名誉村長、山川小学校長
伴繁之助	御原郡	小郡村		○	大地主、村会議員、郡会議員、村農会長
草野道源	山本郡	草野町		-	
中垣弥一郎	御井郡	久留米市	櫛原町	-	
中垣実平	御井郡	久留米市	櫛原町	-	
鹿毛種蔵	御井郡	久留米市	櫛原町	○?	金島村長、金島銀行取締役
高松直之	御井郡	久留米市	花畑	○?	大堰村収入役、郡会議員、名誉職参事会員

出典：「柳園名簿」『昆江井上先生』1937年、『三井郡人名辞書』1913年、『筑後名鑑』1932年、『久留米人物誌』1981年より作成。

注：1925年の現存者、謝恩祭当時の調査による。「人名辞書」の○は記載あり、-は記載なしを示す。以下、同じ。

姓名	市郡名	地名	人名辞書	備考
鏡山治	山本郡	草野	-	
中村茂	山本郡	矢作	-	
中牟田恒八	山本郡	善導寺	-	
釈能純	山本郡	与田	-	(西哲寺)
井手忠次郎	御原郡	高樋	○	村会議員、郡会議員、県会議員
楠周三郎	御井郡	宮ノ陣	-	
本間一郎	御井郡	鯉ノ段	○	父は医者、小児科医、郡医
田中正道	御井郡	味坂	○	父は藩士、鹿児島税務監督局長
田中新吾	御井郡	味坂	○	正道の弟、県会議員、イネ『三井神力』開発
田中勝	御井郡	味坂	-	
三原政刀	御原郡	松崎	-	
三原久刀	御原郡	松崎	○	富豪、村会議員、郡会議員、県会議員
三好(定慶?)	御原郡	松崎	○	号は好学、随宜園運営(500人)
道家精一郎	御井郡	金島	-	
玉井政記	御原郡	小郡	-	
池内虎太郎	御原郡	小郡	○	家系は庄屋、学務委員、戸長、名誉村長
田中実三郎	御原郡	小郡	-	
釈靈曜	御井郡	仁王丸	-	
釈恵秀	御井郡	仁王丸	-	
中垣寛太郎	御井郡	仁王丸	-	
中垣貞吉	御井郡	仁王丸	-	
植原万次郎	御井郡	仁王丸	-	
光安順次郎	御井郡	赤司	-	
南島六太郎	御井郡	赤司	-	
田中芳太郎	御井郡	赤司	-	
宮崎嵩	御井郡	赤司	-	
田本小一郎	御井郡	赤司	-	
中垣省策	御井郡	大城	-	
太田矢六(郎)	御井郡	大城	○	家系は弓術・柔術、柔術道場運営(200人)、村会議員
太田中	御井郡	大城	-	
中孝太郎	御井郡	稲敷	-	
中敬三郎	御井郡	稲敷	-	
井上清次郎	御井郡	北野	重複?	材木・肥料商、町会議員、三井電気軌道株式会社取締役
井上藤吉	御井郡	北野	-	
植原成一郎	御井郡	中村	-	
田中浩	御井郡	鳥巢	-	
前野登	御井郡	高良村	-	
小柳木又	御井郡	高良村	-	
小柳政五郎	御井郡	高良村	-	
鹿毛敬太	山本郡	蜷川	-	
鹿毛知孝平	山本郡	蜷川	-	
矢永静(倭)馬	御井郡	大堰	○	富豪、銀行重役、郡村の公職多数、農本主義
尾関定	御井郡	大堰	-	田町に開院
中垣成吾	御井郡	乙丸	-	
中垣正太郎	御井郡	乙丸	○	校長、名誉村長
田村権蔵	御井郡	安永	-	
熊谷直衛	御井郡	安永	-	
立花実衛	御井郡	八重亀	-	
大神淳朴	御井郡	八重亀	-	
大神正彦	御井郡	八重亀	-	
柴田元龍	山本郡	柳坂	-	

姓名	市郡名	地名	人名辞書	備考
柴田	山本郡	柳坂	-	
上野雷八	山本郡	柳坂	○	大地主、民権家（自由党のリーダー格）、農本主義
宮原速水	山本郡	矢作	○	日吉神社ほか神職、山川招魂社社司、三井郡神職支会長
重富一	御井郡	乙丸	○	家系は郷士、郡会議員
中垣栄太郎	御井郡	乙丸	-	
鏡山権次郎	山本郡	吉木	○	村会議員
鏡山久兵衛	山本郡	草野	-	
権藤可善	御井郡	御井町	-	儒医
権藤嘉納	御井郡	御井町	-	儒医

出典：「門人名簿補逸」「昆江井上先生」1937年、『三井郡人名辞書』1913年、『筑後名鑑』1932年、『久留米人物誌』1981年より作成。

姓名	市郡名	地名	人名辞書	備考
佐々木正蔵	御井郡	味坂	○	戸長、県会議員、衆議院議員
石野栄三郎	御井郡	久留米	-	
本荘看月	御井郡	久留米	-	
小本正吾	御井郡	久留米	-	
江中万蔵	御井郡	久留米	-	
高橋弘鎧	(三井郡)	三井	-	
久保山遠太	山本郡	善導寺	○	酒造家、村会議員、郡会議員、名誉村長、筑肥銀行取締役
竹中雄三郎	御井郡	石崎	-	
山脇喜代太	御井郡	宮ノ陣	-	
尾関章	御原郡	本郷	-	
田中達慈	(三井郡)	三井	-	
山口伸吉	御井郡	北野町	-	
石井俊太郎	御井郡	北野町	-	
長野茂	御井郡	大堰村	-	
河原兎五郎	御井郡	大堰村	-	
高松貞吉	御井郡	乙丸	-	
上杉要太郎	御井郡	北野町	-	
本間健太郎	御井郡	宮ノ陣	-	
宮崎栄	(三井郡)	三井	-	
山川末次郎	(三井郡)	三井	-	
三原康次	御原郡	小郡	-	
三原熊来	御原郡	小郡	-	
稲益芳三郎	(三井郡)	三井	-	
森田駒吉	(三井郡)	三井	-	
矢野徳三郎	(三井郡)	三井	-	
中牟田為三郎	(三井郡)	三井	-	
中村守雄	(三井郡)	三井	-	
松石市太郎	(三井郡)	三井	-	
山脇岩雄	御井郡	宮ノ陣	-	
関寅太	御井郡	宮ノ陣	○	村会議員、名誉村長
関久次郎	御井郡	宮ノ陣	-	
河原半之丞	御井郡	宮ノ陣	-	
森崎彦次郎	御井郡	宮ノ陣	-	
三原常五郎	御井郡	大城村	-	
千原仙之助	御井郡	大堰村	-	
江上太一郎	御井郡	久留米市	-	

出典：「門人名簿（追録）」『昆江井上先生』1937年、『三井郡人名辞書』1913年、『筑後名鑑』1932年、『久留米人物誌』1981年より作成。

注：「市郡名」の（ ）は筆者による。

表4 私塾経営者一覧

人名	塾名	内容
後藤顕蔵	不詳	「先生氏は後藤、字は起雲、通称は顕蔵、筑水と号す。父は周助、母は柳瀬氏、文化十四年某月某日旧竹野郡恵利村に生る。・・初め重富繩山に学び、後井上知愚の門に遊ぶこと三年、業成り帰りて家塾を設け子弟を薫陶す。門に及びしもの九百を超えたり。・・」(『浮羽先哲遺芳』2)。1872(明治5)年11月29日入水、享年56(『浮羽銘鑑』)。
吉富復軒	吉富塾	1836(天保7)年12月、竹野郡吉富村に出生。1893(明治26)年、一家で熊本県に移住、1914(大正3)年12月に死去、享年79(『浮羽銘鑑』)。「先生氏は吉富、名は置孝、後置国と更む。字は晋卿、通称は亀次郎、復軒と号す。父は岩次、母は中村氏、天保七年十二月十三日竹野郡吉富村に生る。・・既にして井上直次郎に学ぶ。奇童を以て遇せらる、後淡窓翁の門に遊ぶ。三年業成りて帰り帷を田主丸町に下し子弟を薫陶す。慶応二年藩其の篤学を賞し二口俸を給す。明治二年藩擢んで士籍に編し藩学の教官となす。後命して東京に出て安井息軒に従学せしむ。・・維新後は公務の旁子弟を集め教養するを常とせり。・・」(『浮羽先哲遺芳』1) ①文久年代2、3年間、田主丸町字中町で漢学を教える。②1861(文久元)年と1875(明治8)年、竹野村西郷で漢文、作文を教える。教科書は日本国史、十八史略、大学、論語、中庸、孟子、五経、文章軌範(『浮羽郡教育沿革史資料』)。
石橋六郎	不詳	1843(天保14)年8月8日、竹野郡隈村に出生。文久2年より長崎にて医学修業。慶応元年帰郷して医業に従う。小河真文の依頼により、1870(明治3)年4月、久留米に潜入した大楽源太郎を3ヵ月隠匿し、1871年12月禁獄3年に処された。1881年3月、一家を福島県安積郡原野開拓の久留米開墾社に移住させた。のち福島・山梨・高知3県の警察官を歴任。1895年2月、台湾総督府民政局に勤務し、1902年12月退職。晩年は久留米で報徳会の振興に努め、社会教化に尽瘁。1922(大正11)年8月16日に死去、享年80(『久留米人物誌』)。1854(安政元)年、12歳で昆江に学ぶ。長崎から帰郷し、医業のかたわら漢籍を教える、1865年から1870年ごろ(『石橋六郎翁伝』)。教科書は大学、論語、中庸、孟子、五経(『浮羽郡教育沿革史資料』)。
福田硯寿	不詳	竹野郡田主丸町に出生。願寿寺8世(『浮羽銘鑑』)。1894(明治27)年秋より翌年冬まで文章軌範を十数人に講じる。1906年10月5日より1920(大正9)年7月30日まで入門者150人、水分校職員のため文章軌範を講じ、作文を教える。自坊で詩経、書経、老子、荘子、論語、十八史略、遠思楼など指導。漢詩の添削は郡内だけでなく、遠方より請う者がいる。1923年5月より田主丸郵便局員、集配人のため作文を教える(『浮羽郡教育沿革史資料』)。
権藤嘉納	不詳	号は千山、権藤本家7代、儒医で儒学を講じる。1909(明治42)年9月1日に死去、享年74(『久留米人物誌』)。
三好貞慶	随宜園	1822(文政5)年、御原郡松崎町光應寺に出生。1838(天保9)年から9年知愚に学ぶ。のちに随宜園を開く(『小郡市史』)。
石井眞太郎	弘道館	1862(文久2)年12月3日、竹野郡千年村に出生。1937(昭和12)年12月10日に死去、享年76。1880(明治13)年10月から1884年3月まで昆江に学ぶ(『昆江井上先生』)。昆江を含め、倉富篤堂、吉富復軒、米谷春里らに8年学ぶ。1893(明治26)年、私塾弘道館を吉井町圓應寺に起こして子弟を教える(『浮羽銘鑑』)。

出典：『浮羽先哲遺芳』1・2(1915年・1919年)、『浮羽郡教育沿革史資料』1930年、『浮羽銘鑑』1940年、『久留米人物誌』1981年、『石橋六郎翁伝』1934年、『小郡市史』第2巻、2003年、『昆江井上先生』1937年、より作成。



福田芳太郎は、御井郡大城村に生まれ、村会議員、郡会議員、大城村長などの公職を歴任している。地元の養蚕業の振興に努め、また三井電気軌道株式会社監査役となり、九州鉄道（現西日本鉄道）への合併に力を尽くしている。<sup>42</sup>柳園塾の存在している、地元の名士といつてよい。

久保山遠太は、浮羽郡浮羽村の石井家に生まれ、山本郡善導寺村の久保山家を継ぎ、家業の酒造業に従事している。銘酒『朝風』は品質に優れ、その名声は山本郡外にも知られていた。村会議員、郡会議員、善導寺村長などの公職を務め、また筑肥銀行専務取締役につき、経営再建に成功している。<sup>43</sup>

## おわりに

井上知愚・昆江の父子は、咸宜園で学んだあと、郷里で漢学塾を開き、漢詩文を重視し月旦評を採用するなど、咸宜園方式を取り入れた教育を行った。門人は柳園塾近辺の指導層、知識層の子弟が中心であり、のちにその出身地の指導者になる人物が多いように思われる。

筆者が調べたところでは、三井郡の指導層は近世から近代へ転換していくなかでも地位や立場を維持しており、大きな変化はみられなかった。とすると、柳園塾はこの維持に対し、結果的に貢献したとも考えられよう。

最後にいくつか課題をあげておきたい。まず、庄屋や名主に代表される村役人たちは、明治政府により地域の総責任者として戸長や副戸

長に任命された者が多かった。明治政府は町村民に近く、影響力のある地域の指導層を責任者にするのが得策だと考えたのである。

そもそも、庄屋、豪農など近世の指導層が、戸長、副戸長など近代の指導層になったことはよく知られている。つまり、地域の責任者の顔ぶれは、政治体制が変わっても維持された。そうだとすると、柳園塾に学んだ人たちに指導層が多かったのはどういうことなのだろうか、また地域にどのような影響があったのだろうか。たとえば、柳園塾は明治になっても漢学を中心に教えたが、近代化は欧米の学問を必須としたであろう。地域の指導層が近代化を進めるにあたり、その影響はどうだったのだろうか。

次に、咸宜園の門人が郷里で私塾を経営し、さらにその門人が私塾を開くといった系譜が続くのは、本文で指摘した通りである。筑後国は豊前国である日田に接しており、咸宜園の影響は時間をかけて広く展開したと考えることができるだろう。従来、咸宜園の教育は、その方法や漢文そのものの修得に注目されることが多かった。その一方、咸宜園、その系譜にあたる私塾の思想性や政治性はほとんど考察されていないように思われる。

また、同じ柳園塾出身の門人たちのその後はどうだったのだろうか。たとえば、明治以降の三井郡の政界は「民党」と「非民党」に分かれ、両者の対立は激しかったが、柳園塾出身者同士が両陣営に属して、衆議院議員選挙や県議会議員選挙で鎬を削っている。<sup>44</sup>三井郡の政党・政派でいうと、柳園塾出身者同士で長い間、激しく争っているのがわかる。その一方、柳園塾出身者たちは履歴を重ねるなかで、お互

いに便宜を図ったり、協力し合ったりすることもあったようである。<sup>45</sup>  
柳園塾出身者であることが、その後どのように影響するのか、興味深い。  
い。

最後に、私塾が学制への対応を含めて、いつどのようにして閉塾していかのか、明らかではないように思われる。そのため、明治以降、私塾が地域社会のなかでどのような役割を果たしていたのか、よくわからないままではないだろうか。<sup>46</sup> そうした課題に向き合うことにより、私塾をトータルで理解することが可能となるだろう。

以上の諸点については、今後の課題としたい。

1 『筑後名鑑』は、三井郡（一九三二年）のほかに、久留米市（一九二二年）、八女郡（一九二四年）を確認することができる。久留米市は、歴史、地勢、旧跡、現代の人名録の構成になっている。八女郡は、日本の通史、地方史、懐良親王の事蹟、学校や会社などが記述されている。

2 大城村教育委員会『大城村郷土読本』一九五四年、一六〇頁によると、塾は昆江が亡くなる一八八八年まで続いたとある。一方、昆江は一八八五年に故郷を離れ、咸宜園で教えているが、塾をどうしたのかはよくわからない。詳しくは、第1章第2節を参照。

3 私塾に関する研究状況は、海原徹「近世日本の私塾」（日田市教育庁世界遺産推進室『廣瀬淡窓と咸宜園―近世日本の教育遺産として―日田市教育委員会、二〇一三年）、川村肇『教育思想と藩校・私塾に関する研究』（教育史学会編『教育史研究の最前線Ⅱ』六花出版、二〇一八年）を参

考にした。

4 二〇〇〇年以降の主な研究書だけでも、深町浩一郎『広瀬淡窓』（西日本新聞社、二〇〇二年）、海原徹『広瀬淡窓と咸宜園―ことごとく皆宜し』（ミネルヴァ書房、二〇〇八年）、高橋昌彦『廣瀬淡窓』（思文閣、二〇一六年）をあげることができる。

5 咸宜園の調査研究は、二〇一〇年度に発足した大分県日田市の「咸宜園教育研究センター」が中心になっている。

6 生馬寛信編『幕末維新时期漢学塾の研究』（淡水社、二〇〇三年）のなか―越後・長善館と民の近代教育の原風景（東京大学出版会、二〇一四年）は、おもに明治以降の地方の漢学塾について論じている。

7 文部大臣官房報告課『日本教育史資料九』一八九二年、三〇七―三一〇頁に、福岡県の私塾一覧が掲載されているが、柳園塾は記されていない。その理由は不明である。

8 海原徹『近世私塾の研究』（思文閣、一九八三年）。木村政伸『近世地域教育史の研究』（思文閣、二〇〇六年）は、寺子屋や私塾といった類型にそって理解するのではなく、「地域」の教育構造を明らかにする必要があると述べている。

9 木村亀齡『北野町史誌』（三井郡北野町教育委員会、一九六九年）一九五頁によると、知愚の時に「集るもの五百人」とある。ただし、昆江の塾長時代も合わせた門人の総数は明らかではない。

10 知愚・昆江の略歴は、倉富了一『昆江井上先生』一九三七年、を中心に、咸宜園時代は、渡辺みか・吉田博嗣『咸宜園門下生略伝（六）井上知愚・井上昆江』（日田市教育庁咸宜園教育研究センター編『咸宜園教育

- 研究センター研究紀要』第八号、日田市教育委員会、二〇一九年）を参照している。
- 11 日田郡教育会編『増補淡窓全集』中巻（思文閣、一九七一年復刻）一九七頁。
- 12 同前、二九七頁。
- 13 同前、三四二頁。
- 14 『淡窓日記』は、一八二五年八月から十二月まで知愚についての記述はない。また、『淡窓日記』は一八二六年と二七年の二年間存在しない。知愚は一八二七年の春に淡窓を訪れている。以上の状況から判断した次第である。詳しくは、前掲「咸宜園門下生略伝（上）井上知愚」を参照。
- 15 前掲『増補淡窓全集』上巻、三三二頁。
- 16 「柳園塾」という名称は、いつつけられたのか、明確ではない。知愚が亡くなり、昆江があとを継いだときに名付けたという記述がある（篠原正一『久留米人物史』久留米人物誌刊行委員会、一九八一年、六八頁）。
- 17 恒遠俊輔『幕末の私塾・蔵春園 教育の源流をたずねて』（葦書房、一九九二年）八五頁。
- 18 田主丸町誌編集委員会『田主丸町誌 第三巻 ムラとムラびと下』（田主丸町、一九九七年）三五七頁。
- 19 後藤顕蔵、本間一郎、上野雷八らが両塾で学んでいる（前掲『昆江井上先生』、浮羽史談会『浮羽先哲遺芳二』一九一九年、小俣愨編『三井郡人名辞書』一九一三年）。
- 20 前掲『増補淡窓全集』下巻、八五五頁。
- 21 同前、九八二―九八五頁。
- 22 吉田博嗣の試算によると、九級に到達したのは、条件に該当する門人三一〇〇人のうち、わずか四〇人であったという。そのうち、入塾後三年未満で九級に到達した塾生は六人であり、入塾時に十歳代だったのは二人であった（「咸宜園と月旦評―九級に達した門人たち」咸宜園教育研究センター『図説咸宜園―近世最大の私塾』日田市教育委員会、二〇一七年）。昆江は十七歳で入塾し、三年一ヶ月で九級に達している。昆江は六人のなかには入っていないが、極めて優秀であったと言えるだろう。
- 23 前掲『増補淡窓全集』下巻、九九二―九九三頁。
- 24 『廣瀬本家日記』（公益財団法人廣瀬資料館所蔵）によると、昆江が一八八五年九月二十七日、咸宜園に到着したこと、翌一八八六年五月十日、近々筑後へ戻ることが記されている。要するに、昆江は日田へ来て八月も経たずに郷里へ帰ったことになる。
- 25 前掲『図説咸宜園』四四頁。
- 26 柳園塾は学制に対応して、狭義の普通科として「柳園学校」と改称し、数科目の学科を設けたが、依然として漢学が中心であった（前掲『大城村郷土読本』一六〇頁）。同様な指摘は、他にもみられる。
- 27 同前、一六二頁。
- 28 宮原サメ「ご挨拶」（前掲『昆江井上先生』）。
- 29 前掲『昆江井上先生』二二二頁。
- 30 同前。
- 31 同前、二三頁。
- 32 同前。
- 33 前掲『図説咸宜園』五三―六八頁によると、咸宜園は月旦評の評価対

象として、「課業」「試業」「消権」の三つの学習課程があり、毎月一日に月旦表を作成している。

34 前掲『昆江井上先生』二二頁。

35 同前、二一七―二二三頁。

36 同前、二二〇頁。

37 同前、二二三頁。

38 前掲『廣瀬淡窓と咸宜園』二五〇―二五四頁。

39 前掲『浮羽先哲遺芳』三六―三七丁。

40 倉富了一『石橋六郎翁伝』一九三四年、六一―二二頁。

41 前掲『三井郡人名辞書』一七九―一八一頁。詳しくは、時里奉明「佐々木正蔵小論―筑後川の「治水翁」と呼ばれて」（小郡市郷土史研究会『故郷の花』第四〇号、二〇一五年）を参照。

42 前掲『三井郡人名辞書』一五四―一五五頁。

43 同前、一二五頁。

44 小郡市史編集委員会編『小郡市史 第二卷 通史編 中世・近世・近代』二〇〇三年、九八七―一〇一八頁。三井郡は明治期から昭和戦前期まで、一八九〇年第一回衆議院議員選挙の「民党」と「非民党」の対抗関係の構図が基本的に続いていたことが指摘されている。たとえば、一八九二年第二回衆議院議員選挙において、池内虎太郎（民党）と佐々木正蔵（非民党）、また一九〇三年の県議会議員選挙において、三原久刀（民党系）と田中新吾（非民党系）が同じ選挙区で立候補し、激戦になってくる。四人とも柳園塾出身者であった。

45 佐々木正蔵と田中新吾は、出身地が近く、ともに柳園塾で学んでいる。

その後、佐々木は衆議院議員として、田中は県議會議員として、筑後川の治水に共闘、尽力している（時里前掲論文）。

46 池田前掲書は、明治時代における個別の私塾越後・長善館を取り上げ、フォーマルな教育に包摂される前のノンフォーマルな教育の可能性について、地域性をふまえながら検討している。

（ときさと のりあき・日本語・日本文学科 教授）



幕末維新期における私塾と地域社会  
— 筑後国御井郡の柳園塾 —

時里奉明

筑紫女学園大学  
人間文化研究所年報

第三十号 二〇一九年